

E-17 乳児を育てながら働く婦人の生活と疲労について
 名臣屋大邑・棚橋昌子，愛知県大文 中田照子，
 愛知教育大家政 高橋春子 野田満智子

目的—既婚婦人の労働への参加は，早こりに増加しているが，婦人が子供を育てながら働き続ける条件の整備は遅れている。特に乳児（3才未満児）をもつ婦人は，仕事・家事・育児の負担が重なり，疲労が蓄積されていると考えられる¹⁾。今回，母親側の要因として，母の取業に着目し，子側の要因として末子の年齢に着目して，自覚症状（30項目）の分析を行ない，専業主婦の自覚症状との比較検討を行なったので報告する。

方法—調査対象は，名古屋市内の無認可保育園へ（病院内保育園129名，個人立保育園89名，共同保育園114名，計332名）子供を預けて働く婦人であり，調査時期は1978年12月である。専業主婦としては，市内H保健所の健診受診者に自記式アンケート調査を依頼した。回収数280名，回収率83.3%であった。調査時期は1979年12月～1980年1月。

結果—表1は自覚症状30項目についての平均許乏数である。母の取業別にみると，朝の許乏数には差はみられないが，夜の許乏数では，看護取>事務取>専業主婦の傾向がみられる。1)すれの場合，末子が0才の群では許乏数が多くなっている。この背景要因についての検討をすすめ

表1 母の取業別末子の年齢別平均許乏数（被家族のみ）

取業	看護取（常勤）114例				事務取（常勤）64例				専業主婦 157例		
	0才	1才	2-3才	4-5才	0才	1才	2-3才	4-5才	0才	1才	2-3才
総例数	39	37	35	3	39	14	10	1	65	62	30
朝	4.5	3.8	2.7		5.2	3.2	3.0		5.0	2.7	3.4
夜	10.1	8.9	8.1		9.4	7.3	7.2		7.2	6.7	5.7

1)働く母親と子どもの生活実態調査 名古屋市市民局（S.55年3月）